

Journal of Flow Injection Analysis の 20 年

JFIA 編集委員長 酒井 忠雄
(愛知工業大学)

1984 年 1 月に「フローインジェクション研究会」は発足し 6 月に研究会会報「FIA」及び会誌 Journal of Flow Injection Analysis, Vol.1, No.1 が創刊された。研究会世話人代表に石橋信彦先生(九大工)が就任され、28 名の委員から構成された。「あいさつ」では石橋先生が「このように研究が多いということは、FIA が発展途上にあることを示すほかありません。わが国の研究者間ではまだあり合わせの機器を巧妙に組み立てて実験研究が進められているところも多いようでハード面の一段の進歩が期待されます。……本会もこれで一応軌道に乗り、走り出したという感じですが、まだ鈍行並みであります。しかし動き始めた以上、目的地に向けて微力ながらかなうかぎりの努力をしたいと思います」と述べられている。石橋先生のフィロソフィーと熱意を感じる。会報には「寄稿」「フローインジェクション分析の応用—ケイ酸塩分析」(黒田六郎)、「接触分析と多成分同時分析」(田中明, 出口俊雄)「タイトルサービス…学会情報」「会告」が掲載された。事務局は九大・工学部・応用化学教室に置かれ、今坂籐太郎先生がお世話された。編集後記には「FIA 会報」と「FIA 研究会会誌」の同時創刊にあたられたご苦勞が伺える。表紙はいずれも佐藤美紀子氏によりデザインされ現在も評判がよい。研究会誌の総説は「無機環境汚染成分のフローインジェクション分析」(桐栄恭二)「酵素を固定化した反応管を用いるフローインジェクション分析」(小島次雄, 森下富士夫), 研究報告には 2 報の論文が掲載された。今も継

続され貴重な情報源となっている Bibliography(1)は与座範政先生により纏められた。編集委員長は石橋信彦先生, 編集委員は今坂籐太郎, 与座範政先生が務められた。今年 20 年を迎えるが、石橋先生を始め諸先輩の先生方のご努力と情熱なしにはとうてい 20 年の歴史を刻むことは難しかったと FIA 研究会の一員として感謝している。1985 年に一冊に纏められ Journal of FIA, Vol.2, No.1 が出版され、編集委員は石橋, 与座, 今任稔彦先生が務められた。巻頭言(石井大道), 指標(四ッ柳隆夫, 辻章夫), 総説 2 報, トピックス 2 報, 研究報告 3 報他が掲載されている。Vol.3, No.1(1986)には指標に Prof. E.H.Hansen and Prof.J.Ruzicka が「The Growth of Published Papers on Flow Injection Analysis」, Prof. K.K.Stewart が「Some Thoughts About FIA in 1986」と題して寄稿し手頂いた。FIA の創始者, 二組の JFIA へのメッセージは大きな力添えである。以降の指標にも Prof. E.Pungor (Hungary, Vol.3, No.2, 1986), Prof. G.C.Pacey (USA, Vol.4, No.1, 1987), Prof. Z.Fang (China, Vol.4, No.2, 1987)など多くの著名な研究者の寄稿がある。Bibliography (VI, Vol.3, No.2)は今任先生, VII~X は今任, 大浦博樹先生が, 11~18 は馬場嘉信先生, 19~20, 和田弘子, 山田碩道, 湯地昭夫先生, 21~22 (Vol.11, No.1, 1994) 小熊幸一先生 23~24 田中明先生, 25~26 酒井, 大野典子先生 27~28 手嶋紀雄先生 29~35 手嶋, 酒井 36 手嶋, 受田浩之先生 37~受田先生が担当, また学会情報は Vol.5, No.1, 1987~Vol.14, No.2, 1997 までの 10

年間、友田正子、内田和秀先生（聖マリアンナ医科大）に貴重な資料を長きに渡り担当していただき感謝している。1990年に日本分析化学会の研究懇談会に加わり、研究会の名称は「フローインジェクション分析研究懇談会」となり世話人代表は委員長に変わった。Vol.8, No.1まで石橋編集委員長のもとで順調に発刊されていたJFIAであったが、国際会議Flow Analysis V開催中の1991年8月23日に実行委員長として重責を担っておられた石橋先生の突然の訃報を耳にし言葉を失ったことを今でも鮮明に思い出す。その後大倉洋輔先生（九大薬）が懇談会委員長に就任され Vol.9, No.1(1992)から和田弘子先生（名工大）を編集委員長に選び編集幹事5名・編集委員10名からなる委員会が構成された。No.1には国外から4、国内から3報の論文が掲載され、JFIAの国内外からの評価が高まりつつあることが伺える。Vol.10, No.2には石橋先生を偲ぶ寄稿が熊丸尚宏先生（広島大理）、上野景平先生（熊本工大）、喜納兼勇先生（同仁化学研究所）から、また Prof. E.H.Hansen が「The Role of Professor Ishibashi in the Promotion of Flow Injection Analysis」を寄稿した。1994年本懇談会の委員長に本水昌二先生（岡山大理）が選ばれ、現在に到っている。JFIA, Vol.13, No.1 (1996) から編集委員長は河島拓治先生（筑波大化学系）が選出され、編集委員も入れ替えが行われた。1998年発行の Vol.15, No.1 から編集委員長を酒井が担当することになったが、JAFIA はちょうど創立15周年を迎えた。この記念すべき年に委員長を仰せつかり大変光栄に感じている。Prof. Gary D. Christiann (Washington Univ., USA) から「JFIA Reaches a Milestone as Leading Publication in Flow Injection Analysis」のメッセージが寄せられた。またこの号から FIA 研究を長年リードしてこ

られた先駆者の先生に「Personal Review」の執筆をお願いするカラムを新設し、桐栄先生（岡山大学名誉教授）に「FIA と私」を執筆頂いた。研究論文は英文論文の投稿が目立ち5報が収録された。No.2には Prof. J.Ruzicka (Washington Univ., USA) 「Two Anniversaries and Three Generations」が寄稿された。15周年を機に日本分析化学会・フローインジェクション分析研究懇談会褒賞委員会が設けられ、厳正な審査の後、多数の応募の中から1998年度FIA学術賞、進歩賞、技術開発賞が授与され、その業績が紹介された。またJAFIAの学術的発展多大な貢献をして頂いた参与の先生方には学術栄誉賞が贈呈された。2000年2月に記念特集号としてFIAの技術を分かり易く理解・導入するユーザー向けの手引書として「技術論文集」Vol.16, Supplementが発行された。275例が収録されており応用分析には有用と考える。2000年から出版スタイルがA4版2段組に変更され、読み易くなったと好評である。ここ数年国内外から英文論文の投稿が増え（大半は電子投稿）、Vol.18, No.2, 2001には6、Vol.19, No.1, 2002には5、No.2には6編全てが英文論文となった。丁寧に審査して頂いている先生方に深謝する。また役員及び編集委員の名簿を英語バージョンで掲載した。石橋先生はJFIAがInternationalに評価されることを願っておられたが、その役目が担えるように成長させたいものである。一方会員に反映することも大きな役割で、その企画としてVo.20, No.1, 2003から「解説」が掲載されているので活用願いたい。

JFIAの委員長を仰せつかり20年の歴史の重み・責任を感じているが、前に向かって進んでいけるのは会員並びに編集委員の皆様の協力によるものである。改めて感謝したい。